

注意事項

1. 試験問題の数は30問で解答時間は正味1時間20分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101 県庁所在地
はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例2) 102 県庁所在地はどれか。

2つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102 a b c d e のうち a と c をマークして

102 a b c d e とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) ア. (例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。

イ. (例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 48歳の男性。歩行障害を主訴に来院した。半年前から易疲労感、悪心・嘔吐、めまい及び四肢の感覚鈍麻を自覚している。20歳のときから、自動車修理工場で塗装の仕事をしている。脈拍96/分、整。血圧142/88 mmHg。血液所見：赤血球390万、Hb 11.5 g/dl、白血球4,100、血小板12万。血清生化学所見：総蛋白7.5 g/dl、アルブミン5.0 g/dl、総ビリルビン1.0 mg/dl、AST 78 単位(基準40以下)、ALT 56 単位(基準35以下)、LDH 450 単位(基準176~353)、 γ -GTP 87 単位(基準8~50)。

診断確定に必要な尿生化学検査はどれか。

- a 糖
- b ビリルビン
- c カリウム
- d VMA
- e コプロポルフィリン

2 64歳の男性。末期癌で在宅ケアを受けている。担当医は週に2回午後往診している。最後に担当医が往診した翌日の午前中に訪問看護師から死亡を看取ったとの連絡があった。担当医は直ちに往診し、診療中の末期癌で死亡したと判断した。

担当医の取るべき処置で正しいのはどれか。

- a 警察へ連絡し、監察医を依頼する。
- b 警察へ連絡し、死体検案書を交付する。
- c 警察へは連絡せず、死体検案書を交付する。
- d 警察へは連絡せず、死亡診断書を交付する。
- e 死亡を看取った訪問看護師に死亡診断書を書かせる。

3 70歳の男性。脳梗塞で6か月間入院治療を受け、病状が安定してきた。失語症と右片麻痺とがあるのでリハビリを継続して行っているが、寝たきりの状態である。

紹介する施設として最も適切なのはどれか。

- a 養護老人ホーム
- b 介護老人保健施設
- c 軽費老人ホーム
- d 高齢者生活福祉センター
- e 老人休養ホーム

4 28歳の初産婦。妊娠経過は順調であった。妊娠39週5日に陣痛発来のため入院した。身長160cm、体重63kg。妊娠中の体重増加は11kgである。子宮底長34cm、腹囲90cm。内診所見：児頭は骨盤入口部固定、子宮口3cm開大、頸管の硬度は軟。入院後、陣痛は増強し、子宮口10cm開大、SP+2cmで自然破水した。矢状縫合は横径に一致し、先進する小泉門は母体の左側に触れた。破水後、陣痛はさらに増強したが、4時間経過しても分娩の進行はみられなかった。再び内診したところ、児頭の所見は不変であった。胎児心拍数陣痛図で、早発一過性徐脈がみられる。

診断はどれか。2つ選べ。

- a 軟産道強靱
- b 適時破水
- c 児頭骨盤不適合
- d 低在横定位
- e 胎児性難産

5 50歳の女性。突然出現した右眼瞼下垂を主訴に来院した。複視と前頭部痛とを訴えており、脳動脈瘤が疑われた。

考えられる病変部位はどれか。2つ選べ。

- a 右前大脳動脈
- b 右内頸動脈・後交通動脈分岐部
- c 右中大脳動脈
- d 前交通動脈
- e 脳底動脈・右上小脳動脈分岐部

6 46歳の男性。次第に進行する四肢の筋力低下を主訴に来院した。2年前から両下肢の筋力低下と筋萎縮とが出現し、2か月前から同じ症状が両上肢にも出現した。意識は清明。全身の筋萎縮が著明であり、舌を含め全身の筋肉に筋線維束攣縮を認める。感覚は正常で排尿障害を認めない。両側のBabinski徴候が認められる。

今後起こる可能性が高いのはどれか。2つ選べ。

- a 痴 呆
- b 言語障害
- c 眼球運動障害
- d 呼吸筋麻痺
- e けいれん

7 16歳の女子。食事に対する恐怖を訴え、家族に連れられて来院した。中学2年生の時に、叔母から「ぽっちゃりしている。」と言われたことを契機に、体型に関する関心が高まり、ダイエットを始めた。その後食欲が低下した。身長162cm、体重38kg。血液所見：赤血球320万、Hb 11.0 g/dl。頭部MRIで脳の軽度の萎縮を認める。

この患者でみられるのはどれか。

- a 低体温
- b 頰脈
- c 下痢
- d 脱毛
- e 動作緩慢

8 45歳の男性。突然の呼吸困難を主訴に来院した。既往歴に特記すべきことはない。喫煙歴は40本/日を25年間。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：PaO₂74 Torr、PaCO₂31 Torr。来院時の胸部エックス線写真(別冊No. 1)を別に示す。

まず行うのはどれか。

- a 気管支鏡
- b 縦隔鏡
- c 気管切開
- d 人工呼吸管理
- e 胸腔ドレナージ

別冊
No. 1 写真

9 75歳の男性。血痰を主訴に来院した。1か月前から時に血痰を自覚していたが次第に増強してきた。18歳ころ肺結核で人工気胸術を受けた。身長165cm、体重56kg。体温36.5℃。脈拍84/分、整。血圧104/72 mmHg。胸部聴診では心雑音なく、右呼吸音を聴取しない。腹部で右肋骨弓下に肝を3cm触知する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球378万、Hb 12.8 g/dl、白血球8,700、血小板17万。血清生化学所見：総蛋白5.6 g/dl、アルブミン2.7 g/dl、尿素窒素10.9 mg/dl、クレアチニン0.6 mg/dl、AST 32単位(基準40以下)、ALT 28単位(基準35以下)、LDH 222単位(基準176~353)、CRP 19.8 mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 2A)と胸部単純CT(別冊No. 2B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 血胸
- b 気胸
- c 血気胸
- d 急性膿胸
- e 慢性膿胸

別冊
No. 2 写真A、B

10 35歳の男性。腹痛と粘血便とを主訴に来院した。東南アジアを2週間旅行し、帰国3日目から腹痛とともにイチゴゼリー様の粘血便を1日数回排便している。発熱はない。粘血便の直接鏡検により、偽足を出して活発に運動している虫体が観察される。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 糞線虫症
- b ランプル鞭毛虫症
- c アメーバ赤痢
- d トキソプラズマ症
- e クリプトスポリジウム症

11 60歳の女性。子宮頸癌のため入院し、広汎子宮全摘術を受けた。術後3日目に初めて歩行を開始したところ、突然呼吸困難を訴え、間もなく意識を消失しチアノーゼが出現した。すぐに酸素吸入を開始した。身長154 cm、体重65 kg。呼吸数38/分。脈拍140/分、整。血圧60/40 mmHg。胸部聴診で心雑音はなく、呼吸音は正常である。動脈血ガス分析(自発呼吸、マスクO₂3 l/分) : PaO₂70 Torr、PaCO₂28 Torr。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性左心不全
- b 自然気胸
- c 急性肺塞栓症
- d 大動脈解離
- e 心タンポナーデ

12 76歳の男性。呼吸困難を主訴に救急車で来院した。4日前に強い前胸部圧迫感が数時間持続した。今朝、急に呼吸困難が出現した。呼吸数26/分。脈拍116/分、整。血圧80/50 mmHg。胸部で心尖部に最強点を有する汎収縮期雑音を聴取する。四肢末梢の冷感が著明である。Swan-Ganzカテーテル検査での肺動脈楔入圧(PCWP) (別冊No. 3)を別に示す。

診断はどれか。

- a 左室自由壁破裂
- b 心室中隔穿孔
- c 左室乳頭筋断裂
- d 心タンポナーデ
- e 左室瘤

別冊
No. 3 図

13 43歳の女性。労作時の息切れを主訴に来院した。心エコー検査での長軸断層図(別冊No. 4A)と僧帽弁レベルのMモード所見(別冊No. 4B)とを別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) リウマチ熱が原因である。
- (2) 拡張早期ランブルを聴取する。
- (3) 突然死の危険がある。
- (4) 僧帽弁閉鎖不全が進行する。
- (5) 僧帽弁置換術が必要である。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 4 図A、B

14 41歳の女性。3か月前から皮膚掻痒感があり来院した。2年前に人間ドックで肝障害を指摘されたことがある。身長152 cm、体重51 kg。血清生化学所見：総蛋白8.3 g/dl、トリグリセライド130 mg/dl(基準50~130)、AST78単位(基準40以下)、ALT94単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ(ALP)724単位(基準260以下)、 γ -GTP340単位(基準8~50)、IgA350 mg/dl(基準110~410)、IgG1,850 mg/dl(基準960~1,960)、IgM525 mg/dl(基準65~350)。免疫学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陰性、抗核抗体陰性。

考えられる疾患はどれか。2つ選べ。

- a 脂肪肝
- b 自己免疫性肝炎
- c 原発性硬化性胆管炎
- d 原発性胆汁性肝硬変
- e アルコール性肝炎

15 35歳の女性。頭痛を主訴に来院した。血圧は左上肢で160/96 mmHg、右上肢で134/104 mmHgである。臍上部やや左方に血管性雑音を聴取する。尿所見：蛋白(-)、潜血(-)。

予想される所見はどれか。

- a 左上肢のみの浮腫
- b 血清カリウム値の上昇
- c 血漿レニン活性の低下
- d 血漿アルドステロン値の低下
- e 腎臓の大きさの有意な左右差

16 55歳の4回経産婦。性器出血を主訴に来院した。腔鏡診では子宮腔部は易出血性で全周性に崩壊し潰瘍を呈している。腔壁に明らかな病変は認めない。内診では、子宮は可動性がやや制限されているが正常大である。両側の子宮付属器は触知しない。直腸診で右子宮傍結合織に弾性硬の抵抗を触知するが骨盤壁には達しておらず、左子宮傍結合織は軟である。子宮腔部・頸管細胞診はClass V、子宮内膜細胞診はClass IIである。胸部エックス線写真、腹部CT、大腸内視鏡検査、静脈性尿路造影検査、膀胱鏡検査および骨シンチグラフィで異常所見を認めない。骨盤部MRIで子宮頸部に最大径約3 cmの腫瘤を認める。

最も適切な治療はどれか。

- a 単純子宮全摘術
- b 準広汎子宮全摘術
- c 広汎子宮全摘術
- d 抗癌化学療法
- e 放射線療法

17 62歳の男性。顔と手足とのむくみを主訴に来院した。26歳の時にBasedow病に罹患し、放射性ヨード治療を受けた。数年前から脱毛が目立つようになった。血清生化学検査では遊離トリヨードサイロニン(free T₃)1.0 pg/ml(基準2.3~4.3)、遊離サイロキシン(free T₄)0.3 ng/dl(基準0.9~1.7)である。

この患者でみられるのはどれか。

- a 不眠
- b 頻脈
- c 便秘
- d 発汗過多
- e 体重減少

18 46歳の女性。1か月前からの四肢の脱力があり来院した。2年前から高血圧を指摘されている。下痢や嘔吐はなく、降圧利尿薬は服用していない。脈拍68/分、整。血圧170/110 mmHg。血清生化学所見：アルブミン4.1 g/dl、Na 141 mEq/l、K 2.1 mEq/l、Cl 101 mEq/l、Ca 9.2 mg/dl。

診断のために必要な血液生化学検査はどれか。

- (1) 甲状腺刺激ホルモン
 - (2) 副甲状腺ホルモン
 - (3) レニン活性
 - (4) アルドステロン
 - (5) コルチゾール
- a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

19 63歳の男性。意識障害と発熱とがあり救急車で搬入された。緊急検査で貧血と血小板減少とが認められた。末梢血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 5)を別に示す。

考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a M蛋白血症
- b 直接 Coombs 試験陽性
- c 間接ビリルビン上昇
- d 血清 LDH 上昇
- e 高 Ca 血症

別冊
No. 5 写真

20 34歳の男性。咳嗽と発熱とを主訴に来院した。眼瞼結膜に貧血はなく眼球結膜に黄疸はない。リンパ節腫脹はなく、腹部に肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球 370 万、Hb 11.9 g/dl、Ht 36%、白血球 49,500、血小板 6 万。末梢血塗抹標本では異常細胞が 68.5% あり。骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 6)を別に示す。

まず行うべき検査はどれか。

- a 血清 FDP 測定
- b 血清免疫電気泳動
- c 組織適合性検査
- d 骨髓細胞のペルオキシダーゼ染色
- e 末梢血好中球アルカリホスファターゼ染色

別冊
No. 6 写真

21 66歳の女性。発熱と体重減少とを主訴に来院した。1か月前から 38°C を超える発熱が続き、抗菌薬を投与したが軽快しない。体重が 3 kg 減少した。両側中下肺に fine crackles (捻髪音)を聴取する。尿所見：蛋白 2+、糖(-)、潜血 3+。血清生化学所見：尿素窒素 48 mg/dl、クレアチニン 2.4 mg/dl、CRP 14.8 mg/dl (基準 0.3 以下)。

診断に最も有用な検査はどれか。

- a 抗 Sm 抗体
- b 抗 DNA 抗体
- c 抗 Jo-1 抗体
- d 抗好中球細胞質抗体 (ANCA)
- e 抗カルジオリピン抗体

22 33歳の女性。突然出現した前胸部の強い痛みと呼吸困難とのため緊急入院となった。3回の自然流産歴がある。1週前から左ふくらはぎの疼痛と腫脹とを認めていた。左下腿は腫脹し、足関節を屈曲するとふくらはぎに強い痛みを訴える。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.54、PaO₂ 60 Torr、PaCO₂ 30 Torr。抗核抗体陽性、抗カルジオリピン IgG 抗体陽性。

この患者で考えられる検査所見はどれか。2つ選べ。

- a 血小板増加
- b 血清 CK 高値
- c 梅毒血清反応偽陽性
- d 心電図での ST 上昇
- e 肺血流シンチグラムでの欠損像

23 1か月の乳児。健康診査で遷延性黄疸を指摘され来院した。生後、灰白色便が続いている。血清生化学所見：総ビリルビン 12.7 mg/dl、直接ビリルビン 8.6 mg/dl、AST 179 単位(基準 40 以下)、ALT 144 単位(基準 35 以下)、アルカリホスファターゼ(ALP) 867 単位(基準 260 以下)。

この疾患について誤っているのはどれか。

- a 新生児肝炎との鑑別が重要である。
- b 生後 60 日以内に手術を行うことが望ましい。
- c 胆道系の悪性腫瘍の発生頻度が高い。
- d 術後胆管炎の予防と治療とが重要である。
- e 術後に黄疸が遷延する場合は肝移植の適応となる。

24 8か月の乳児。顔色不良を主訴に来院した。母乳栄養児である。2か月前から次第に顔色が不良になってきたことに母親が気付いた。眼瞼結膜は蒼白。腹部で肝を 1 cm 触知するが、脾は触知しない。血液所見：赤血球 335 万、Hb 6.7 g/dl、Ht 22%、白血球 7,800 (桿状核好中球 8%、分葉核好中球 22%、好酸球 1%、単球 11%、リンパ球 58%)、血小板 38 万。

この患児の血液検査所見で予想されるのはどれか。

- a 網赤血球 0.1 %
- b 総ビリルビン 2.5 mg/dl
- c 血清 LDH 540 単位(基準 176~353)
- d 総鉄結合能 480 μ g/dl (基準 290~390)
- e ビタミン B₁₂ 102 pg/dl (基準 250~950)

25 1か月の乳児。健康診査のため来院した。在胎 38 週。出生時の身長 48 cm、体重 2,800 g。自然分娩で出生した。母乳栄養で、1回哺乳時間は 10~15 分、1日哺乳量は約 700 ml、哺乳間隔は 3 時間である。排便回数は 1日 5~7 回で、便の性状は軟、便の色は黄色が多いが緑色を呈することもある。母親によると、ドアが閉まるボタンという大きな音にびっくりしたように両上肢を大きく開き、足をすくめる動作が気になるという。身長 52 cm、体重 4,100 g。大泉門径 2.3 cm、平坦。腹部で肝を 2 cm、脾を 1 cm 触知する。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 母乳が不足している。
- b 便の pH は 5~6 である。
- c 大泉門が大きく、精査の必要がある。
- d 大きな音への反応は問題がない。
- e 肝脾腫を精査する必要がある。

26 60歳の女性。視力障害を主訴に来院した。眼底検査の結果、網膜色素線条が認められ、頸部と腋窩とには扁平隆起した黄色丘疹が多発している。

最も考えられるのはどれか。

- a ヘモクロマトーシス
- b Wilson 病(肝レンズ核変性症)
- c 家族性高コレステロール血症
- d Ehlers-Danlos 症候群
- e 弾力線維性仮性黄色腫

27 55歳の女性。水疱とびらんを主訴に来院した。1か月前から主に前胸部と背部とに水疱とびらんが出現し徐々に増加している。皮膚病変から採取した組織のH-E染色標本(別冊No. 7)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 尋常性天疱瘡
- b 落葉状天疱瘡
- c 水疱性類天疱瘡
- d 疱疹状皮膚炎
- e 後天性表皮水疱症

別冊
No. 7 写真

28 16歳の女子。学校の健康診断で難聴を指摘され来院した。高校受験で希望の高校に合格できず、かなり落ち込んでいたという。家庭での日常会話には不便を感じていない。純音聴力検査で両側の平均聴力は80 dBであり、感音難聴を認める。前庭平衡機能検査では異常を認めない。インピーダンスオージオメトリはA型である。

診断に有用なのはどれか。

- a 語音聴力検査
- b 聴性脳幹反応(ABR)検査
- c アデノイドエックス線撮影
- d 側頭骨単純CT
- e 頭部単純MRI

29 24歳の女性。両眼の視力低下を主訴に来院した。3日前から頭痛、耳鳴りがあり視力の低下を自覚している。両眼とも矯正視力は0.3である。両眼の前房に細胞を認め、眼圧は左右眼ともに12 mmHgである。左眼の眼底写真(別冊No. 8)を別に示す。右眼の眼底も同様である。

診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。

- a 血糖値測定
- b 胸部エックス線撮影
- c 蛍光眼底造影
- d 髄液検査
- e リンパ節生検

別冊
No. 8 写真

30 65歳の女性。右眼の眼痛と嘔吐を訴えて来院した。前夜から右眼の視力低下と激しい頭痛とがあり、悪心・嘔吐が出現した。視力は右眼0.05(矯正不能)、左眼0.8(1.2 × +1.00 D)。眼圧は右眼55 mmHg、左眼12 mmHgである。左眼には中間透光体、眼底ともに異常がない。

右眼にみられる所見はどれか。

- a 眼瞼下垂
- b 縮瞳
- c 角膜浮腫
- d 眼底出血
- e うつ血乳頭

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)